

人間本質としての労働と『資本論』における「労働日の短縮」

松井 暁（専修大学）

小論の課題は、マルクス主義の将来社会論において労働がどのように位置付けられるかを検討することである。第1節は課題の提示である。マルクスは一方で労働は人間の本質であるとして「労働の解放」を訴えながら、他方で労働日の短縮を通じた「労働からの解放」を唱えた。この姿勢は矛盾している。マルクスの労働概念にみられるこのアポリアは、現在に至るまで解決されていない。この問題に取り組むことを通じて、上述の課題に答えたい。

第2節では、マルクス主義の社会発展論における労働と自由時間の概念を次のように分類した。小論はマルクス主義の観点から資本主義社会から社会主義社会への変化を通じて労働のあり方が変容していくことを問題にしているため、社会体制に応じた労働の態様でもって分類した。L1：資本主義社会における賃金労働，L2：市場経済における労働，L3：私有財産制下の自給自足経済における労働，L4：社会主義社会の貢献原理における労働，L5：共産主義社会における高度な活動としての労働，F1：自由時間における高度な活動，F2：自由時間における余暇。

第3節では、前節の整理を踏まえ、そのうちのいずれが疎外された労働に当たるのかを探った。マルクスの疎外の定義からすると、疎外された労働に当たるのは、L1からL4となる。

第4節では、『資本論』における「労働日の短縮」と関連づけながら、L5とF1、F2について検討した。L5はいっさいの抑圧から解放された労働であり、疎外のない労働である。よって疎外論の観点からすれば、L5は廃棄されるべき労働ではない。しかし、生産力が十分に発展するならば、L5という労働がF1、さらにF2に変換すること、つまり「労働からの解放」が期待される。それはなぜか。労働と自由時間の営為を比べると、後者は文字どおりより自由であり、内的自然としての人間と外的自然としての環境に対する負荷が小さく、自然と人間の共生にふさわしい。これらが労働が廃絶されるべき理由である。

第5節では、前節の議論と、人間本質としての労働というマルクス主義に根強い信念との関係について考察した。共産主義社会の労働は疎外された労働ではなく、「第一の生命欲求」となった労働である。しかし、物質代謝の普遍性から労働本質論を導くことはできない。合目的性は労働の本質であっても、人間の本質ではない。社会的共同と自己実現はたしかに人間の本質と呼びうる性質ではあるが、労働に限定されるわけではないし、むしろ労働から解放された自由時間においてこそこれらの享受はいっそう可能になる。それがゆえに、労働の短縮さらには廃棄が指向されたのである。

第6節は結論として、マルクス主義における労働概念の位置づけについて、私の見解を提示した。資本主義社会において搾取を批判する際には、自己所有権原理を前提とした、よって疎外された労働概念が採用される。疎外された労働を批判する際には、共産主義社会の疎外から解放された労働を基点としている。そして労働そのものを克服すべきであると主張する時には、労働そのものから解放されて人々が自由時間を享受する社会が想定されている。マルクスの労働についてのスタンスは、このように社会体制の発展段階に応じて異なる。資本主義社会に生きる我々にとっての優先問題は「労働の解放」であり、そのために疎外のない労働が人間本質であるかのように提示される。史的唯物論に立脚した内在主義のゆえにこのような方法がとられる。資本主義社会に生きる我々にとっての優先問題は「労働の解放」であるが、共産主義社会では「労働からの解放」こそが中心課題となるのであって、この観点からすれば労働は人間本質ではない。